



## 1. はじめに

小島砲台跡は、日露戦争に際して造られた要塞の一部で、当時の要塞の中では、保存の良い状態で現存するものです。

小島は、愛媛県今治市の瀬戸内海に浮かぶ面積約0.50km<sup>2</sup>、周囲約3kmの小さな島で、来島村上水軍の本拠地であった「来島」、本州四国連絡道路来島海峡大橋の橋脚がある「馬島」などと来島群島を構成しています。今も多くの船が行き交う瀬戸内海の海上交通の要所であるとともに、急流で時には渦巻き、濃霧が発生すれば衝突の危険性が高く、古来からの海の難所である来島海峡の西部に位置します。

## 2. 海路をにらむ小島砲台

日清戦争の後、次なる敵をロシアとみなした日本帝国陸軍は、ロシア海軍が関門海峡を突破し阪神工業地帯の中核である大阪、さらには首都東京へ侵攻するのをくい止めるため、当時の主要な海上航路であった瀬戸内海に要塞建設を計画しました。

調査設計には、城塞学の権威、陸軍工兵中佐上原勇作があたり、欧州視察、芸予諸島調査を経て、来島海峡と忠海海峡防備のため、この小島と大久野島（広島県竹原市）に、敵艦の応射に耐える堅固な要塞を建設しました。この小島と大久

野島の要塞は「芸予要塞」と呼ばれ、小島だけで「来島要塞（以下「小島砲台」という）」と呼ばれました。

明治32年3月に着工し、同35年2月に竣工した小島砲台は、北部・中部・南部の3カ所に砲台が築られました。

山頂部にある中部砲台は小島砲台の中核をなす施設で28cmの榴弾砲が6門、周囲には地下室4



中央砲台跡



地下兵舎跡



弾薬庫跡



司令塔跡

カ所，地下兵舎6カ所，雨水を溜めた井戸が配置され，さらに，山の頂上には司令塔が設けられました。現在では6カ所の砲座跡が残るのみですが，赤レンガの地下兵舎とともに当時の様子を物語っています。また，沿岸部の北部砲台には24cmカノン砲4門と軽砲4門が設置されました。同じく沿岸部の南部砲台には軽砲2門が設置されました。

### 3. 実戦には使われなかった要塞

ご存じのように日露戦争のハイライトは二〇三高地を巡る旅順の攻防と，ロシア海軍のバルチック艦隊との日本海海戦です。小島砲台は，日露戦争終結まで，兵の駐屯はありましたが，実際の戦闘に使用されることはなかったそうです。しかし，中部砲台に設置されていた，28cm榴弾砲2門は，ロシア海軍の拠点で難攻不落の旅順要塞攻撃に使用され，旅順攻略に重大な役割を果たしたといわれています。

その後，飛行機の登場により戦闘方法が大きく変化し，芋予要塞は廃止されました。そして，大正15年，小島砲台は，飛行機の爆撃演習の標的にされました。爆撃演習は2回行われ，最初の演習で砲台の一角をわずかに破壊しましたが，2回目は悪天候のため中止となり，小島砲台はほとんど破壊されずに残ったそうです。

## 4. 歴史の証人

その後，小島砲台跡は地元波止浜町（現今治市）に払い下げられましたが，第二次世界大戦後は，人の手も入らず，荒れ果てた状態となっていました。昭和40年代半ば頃から観光開発の機運が芽生え始め，各砲台跡への道路整備，樅の植栽による遊歩道の整備，地元ボランティアによる清掃・草刈り等が行われています。また，自然体験施設も開設され，中部砲台の上にある司令塔跡は平坦な広場で小島の頂上にあることから，来島海峡大橋や航行する船舶を望むことができ，歴史・観光・レクリエーションスポットとして利用されています。

現在，砲台とともに設置された司令塔，地下兵舎，弾薬庫などの施設は，当時の優れた建築技術を偲ばせる歴史的遺構とし保存されており，歴史の証人として近代日本の歩みを学ぶことができます。

#### 【交通】

- ・波止浜港から小島港へは船で約10分

#### 参考文献

- 「小島砲台の歴史」(小・中学生用)  
(今治市教育委員会ほか，2000年)